

ときめき きらめき いきいきを伝える

広報



# Seiki



## TOPICS

- 保育園入園案内…P08
- お知らせ…P18~26
- 文化会館／図書館…P27
- しあわせヘルスだより…P28~29

語り継がれる

ふるさと  
故郷の物語

・  
・  
・  
・  
。



特集

# 関のむかしばなし



迫間大嶋家代々の菩提寺

関・迫間

だい いうんぜんじ  
大雲禪寺

昔話「どろぼつと十六善神」  
じゅうろくぜんしん

大雲禪寺には十六善神（大般若経を唱える信者を守ってくださる十六の神様）の掛軸があります。その掛軸に伝わるお話です。

「昔むかし、大雲禪寺に一人の男が忍びこみ、十六善神の掛軸を盗んでいきました。

ところが、道中、だんだん掛軸が重たくなり、今まで晴れていた空が暗くなって、激しい雷が鳴り出しました。男は、恐怖を感じながらもなんとか家にたどり着き、掛軸を床の間に掛けますが、今度は掛軸が唸り出します。恐ろしくなった男は、再び掛軸を持って迫間まで戻りました。それまで激しかった雷は静かになり、重たくなった掛軸はすつと軽くなりました。男は、掛軸を道端に置いて逃げ出そうとしましたが、また掛軸が唸り出します。男は、青ざめながら、村人たちに道端に置いてきたことを叫び歩き、やっとの思いで迫間から逃げ出したのでした。

村人たちは、何かと駆け付け、道端に置いてあった掛軸を見つけ、大雲禪寺に戻しました。それから、十六善神の御札は、落雷除けになると言われ、7月18日の十六善神祭に多くの人が御札・御守りを受けに参詣されるようになったということです。」

江戸時代の270年間、美濃國加茂郡迫間村を治めた大嶋一族の初代旗本・大嶋雲四郎光俊公の命日（7月18日）に行われる十六善神祭で受けることができる「落雷除け」の御札・御守り。



大雲禪寺境内にある「観音堂」



しょうかんのんぼさつ  
寺宝「聖観音菩薩」



観音堂に祀られている寺宝「聖観音菩薩」は、平安時代の作と伝えられている。御開帳は、17年に1度。「故郷、迫間の観音さま」という昔話もある。

D A T A

参考文献：「どろぼうと十六善神」『関のむかし話』関市立旭ヶ丘小学校PTA 2015年 から抜粋

所在地：関市迫間1184



QRコードを読み取ると地図が表示されます。



昔話に出てくる掛軸

けんぼんちやくしよくしやかさんぞんじゆうろくぜんじんず  
寺宝「絹本著色釈迦三尊十六善神図」

住職 大本 敏昭さん

大 雲禪寺は、関藩関村の藩主で大名となつた武将・大嶋雲八光義公が創建した迫間村初代旗本・大嶋雲四郎光俊公の菩提寺です。

昔話に出てくる十六善神の掛軸は、江戸時代の初期元和三年（1617）に光俊公が、武運長久を祈願して修復したという記録があることから、室町時代以降に画かれたものと推測されています。

落雷除けの御札・御守りは、ひとつひとつ丁寧に手作りしています。地域住民をはじめ、多くの方がいらっしゃいますが、昔は数千人の参詣者がいたといわれています。

雷が「落ちない」という御札・御守りですので、「落ちない」というキーワードから、特に受験生の方におすすみたいです。

また、「十六善神の掛軸」の昔話以外にも、境内にある「観音堂」に伝わる昔話もあります。とても興味深いものです。

ぜひ、お話を聞きに来てください。





## ななしぎ 昔話「名無木」

**田** 園地帯にぼつんとたたずむ「名無木」。この木がなぜ「名無木」と呼ばれるようになったのかを伝える昔話があります。

「江戸時代中頃のこと。この地方ではひどい日照りが続き、米が不作で年貢が出せず、村人たちは困って代官に許しを請いましたが、聞き入れてもらえませんでした。不憫に思ったこの土地の庄屋の大滝金右衛門は代官に何度も頼みましたが、願いは聞き入れてもらえません。

絶望した金右衛門は、ある夜、代官を手にかけてしまいます。金右衛門は、捕われて張り付けの刑にされてしまいました。

村人たちはとても悲しみ、その亡骸をこの地に葬りました。すると、遺体を葬った所から、見たことのない不思議な木が生えてきました。村人たちは、金右衛門の霊が木になつたに違いないと、その名の分からない木を名無木と呼び大切に育てたということです」。

この木は、モクセイ科のトネリコという名の、このあたりでは珍しい樹木で、昭和50年に岐阜県指定天然記念物となっています。

### D A T A

参考文献：「名無木」『関のむかし話』関市立旭ヶ丘小学校PTA 2015年 から抜粋

所在地：関市東本郷  
関市役所より  
東へ約1km



QRコードを読み取ると地図が表示されます。



# めえでんせつ 昔話「鶴伝説 さるとらへび」

**洞** 戸の高賀神社にある、一度見ると印象に残るであろう「高光公とさるとらへび」像。この現実では考えられないような姿をした恐ろしい妖魔のお話があります。

「大むかし、高賀山に妖魔が住みつき、帝から妖魔退治の命令を受けた藤原高光がやってきました。

高光は、必死に探しましたが見つけれず、神に祈り続けました。ある時、疲れて眠っていると、不思議なひょうたんの夢を見て、動かぬものを討て、というお告げを聞きます。そこで高光は高賀山の山つづきの瓢ヶ岳にねらいをつけました。

頂上まで登ると、そこにはたくさんひょうたんがぶらさがる大木がありました。高光は夢を思い出し、動かないひょうたん目掛けて矢を放ちます。すると、みるみる獣の姿に変わりました。高光は隙を突いて背中に飛び乗り妖魔を討ち取りました。その妖魔は、頭は猿、体は虎、尻尾は蛇で体長3メートルはあるとかという姿でした。高光の活躍により、この地はおだやかな平和が続いたということです。」

## D A T A

参考文献：『鶴伝説さるとらへび』ほらど未来まちづくり委員会  
2016年 から抜粋

所在地：  
関市洞戸高賀1217  
高賀神社



QRコードを読み取ると地図が表示されます。



# せいべえぶち 昔話「清兵衛測と ドチロンベ」

**下** 之保の戸丁とおおもんる津保川には深い淵があります。川岸からのぞいても、川底が見えないほど青々としています。この淵に伝わる奇妙なお話です。

「昔むかし、津保川のこと大好きな森清兵衛という人がいました。ある夜、夢に黒い生き物が現れ、自らを測の穴に住むドチロンベと名乗り、人間の食べ物を求めてきました。翌朝、清兵衛はにぎりめしを川岸に置きました。すると、段々小さくなるのです。それから毎日持っていたのでした。

ある夜、夢でドチロンベが大雨の後に魚がよく取れる所を教えてください、他言しないようにと言います。言う通りにすると魚が大量にとれました。清兵衛はこのことを黙っていました。清兵衛はばあさんにだけ話してしまいました。すると、翌朝からにぎりめしはなくなりませんでした。ある朝、川を眺めていると、測の中からお礼がしたいが、こっちへ来ないか、と声が聞こえました。清兵衛は、誘われるように測の中へ消えていったということです。」

## D A T A

参考文献：「清兵衛測とドチロンベ」『武儀のむかし話続編』NPO法人日本平成村 [2007年]から抜粋

所在地：関市下之保道の駅「平成」より  
下呂方面へ約1km



QRコードを読み取ると地図が表示されます。